
昂

かの@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昴

【Nコード】

N1489Q

【作者名】

かの@

【あらすじ】

龍族のできそこない、翠嵐^{すいらん}。

まだ幼い彼女が成人の儀式で出逢ったのは、一人の若い男だった。

「私は昴流^{すばる}。おまえと契約する者だ」

翠嵐は成り行きで男と一緒に旅をすることになるのだが――。

健気な少女を冷たく素っ気ない男が振り回すように振り回される、ほのぼの(?)年の差ラブストーリー！。

序

狭い洞窟の中で、水の落ちる音が反響する。天上から幾重にも垂れ下がる鍾乳洞が、ぼんやりと青白く浮き上がり、翠嵐すいらんの足下を照らし導いた。

あたりには清廉な気が満ちている。吸い込むだけで自分が生まれ変わっていくようだ。

翠嵐は緊張で震える拳を握り、ゆつくりと、でも確実に前へ進んだ。天空を表す浅葱色の襦に、流水のごとく鮮やかな翡翠の裙を合わせ、更には薄藍の羅紗の上着を重ねている。滅多に着ない正装の衣は、この儀式のためだけに、眷属から献上されたもの。

時間の感覚が消えかけた頃、翠嵐は遂に開けた場所へ辿り着いた。莊厳と呼ぶにふさわしく、壁は複雑に紋様が刻み込まれ、中央には見上げるばかりの祭壇が鎮座みすがたしている。最上段には扉があって、紋様に神々しい龍神の御姿が舞っていた。

そのつるりとした白亜の石の上で、火影が踊る。原始の荒々しい力が、翠嵐を飲み込むかのようだ。消えることのない永劫の炎がその中央で舌なめずりする。翠嵐は、怖かった。本当はすぐにでも、走って逃げ出してしまいたい。

なにせ、ついに辿り着いてしまったのだ。

翠嵐はどうしようもない後悔と、畏れ多さに立ちすくみにそうになる。けれど、突っ立っていていいわけがなかった。龍神様の御前である。

その場で跪き、教えられた決まり文句を唱えた。

「此のたび一族の末席に加えられることになりました、翠嵐にございます」

頭を垂れたまま、某かのお言葉を待つ。しかし、いくら待っても、

何も起こらなかった。

翠嵐は恐る恐る顔をあげる。しんと静まり返った祭壇。何の変化もない。身じろぎしたら碎けてしまいそうなほど固まった空気。それが、意味していることは。

「わたしは、やっぱり…龍じゃないの…?」

ここに辿り着くまでの道すがら、ずっと胸の奥に燻っていた疑念の炎が燃え上がり、微かな希望を焼き尽くした。

喉から熱いかたまりがこみ上げた。翠嵐はそれを抑える術をしらなかった。たちまち堤防は決壊して翠嵐の絶望ごと押し流して行く。こういう時にはたいてい飛焰ひえんがやってきてそっと肩を抱いてくれるのに。もちろんその一番の特効薬はここには存在しない。

「おまえを待っていた」

けれど、驚きが翠嵐の涙を引っ込めた。低い声が耳に届いてから一瞬遅れて、翠嵐はそれが男の発した声だと悟る。いるはずのない祭壇の横の、柱の影から湧き出るように現れた男。すいと面をあげた男の瞳、きらめく漆黒の夜の闇に吸い込まれるような錯覚を覚えた。

「あなたは……だれ？」

「私は昂流すばる。おまえと契約する者だ」

男は鋭い視線で翠嵐を貫いた。

約束

儀式の控えの間で、翠嵐は作り上げられて行く自分をじっと鏡越しに眺めていた。大勢の女官が翠嵐を取り囲み、流れるような動作で衣を着せ、髪を結び、白粉をはたいていく。

女官は皆そっけなく、必要最低限のことしか口にしない。沈黙に息がつまりそうだった。翠嵐は、早く飛焰が来てくれないだろうか、とそればかり考えていた。

「さあ、できましたよ」

女官の中でも一番年かさの、女官長の言葉を合図に、潮をひくように女官が消えて行く。豪華な控え室の中、翠嵐だけが取り残された。寒くもないのに、翠嵐は身を震わせて、ほっと安堵の溜め息をついた。

そして、そんな自分に嫌気がさす。もう雲上原にきて8年になるうというのに、まだこの雰囲気に縮こまってしまふのだ。

ぼんやりと窓の外を眺めると、どんよりとした灰色の雲が、峻厳な山々にまとわりついていていた。いつも眺める下界の燃えるような緑も、今日は霧の中に姿を隠している。

すぐに扉が遠慮がちに叩かれた。

「飛焰！」

翠嵐は途端にぱっと瞳を輝かせて振り返った。入ってきたのは、見慣れた背の高い炎の色の瞳を持った青年——飛焰だった。いつもより格段に重い衣装をもつとせず、翠嵐は飛焰に飛びついた。飛焰は慣れた様子で、両腕を広げてそれを受け止める。

「翠嵐様。あんまり顔をおしつけるとせつかくのお化粧がとれてしまうでしょう」

「いいの！」

翠嵐はぎゅうぎゅうと自分の身体を飛焰におしつけた。形の良い眉を下げて、困ったように飛焰が笑う。彼も翠嵐の不安を十分理解しているのだ。

「飛焰、飛焰も成人の儀式をしたんでしょう？ ねえ、そのことを聞かせてよ」

「そうですね。もう10年も前になりますね。私も翠嵐様みたいに不安で、母上に泣きついた記憶がありますよ」

「ほんとう？」

意外な気がして翠嵐は顔をあげた。飛焰は真面目な顔になって頷いた。

翠嵐がここに連れてこられた時には、すでに飛焰は十分に大人の龍で、頼もしい存在だった。

実際、彼は龍族の男に相応しく肩幅の広い立派な体格をしていたし、整った鼻梁と知性をたたえた緋色の瞳は文句なしに美しい。何も怖いものがないようにみえる。

そんな飛焰が泣いたなんて、そもそも翠嵐と変わらぬ年の頃があったなんて、ちよっぴりおかしい気がする。

「誰でも大人になるのは怖いものです、翠嵐様。自分の足で立って歩かねばならない。最初は怯え、震えるでしょう。それが当然。時々杖にすがってもいい。それでも己の足で立つ、それが誇りというものですよ」

「誇り…」

「龍族は誇り高い一族です。貴方にもその血が流れている」

とん、と人差し指で軽く胸を突かれる。翠嵐の視線は自然と下がった。

本当に、自分は龍族なのだろうか？口に出せない問いが胸のうちでぐるぐると渦を巻く。

翠嵐は自分の父も母も知らない。雲上原に突然6つの時に連れてこられて、龍族なのだと言われただけだ。もう14になるのに、全く力が発現する気配もない。

成人の儀式は、洞窟の奥の祭壇で、龍神様に祈りを捧げ、認めてもらうことだという。翠嵐は、そこで龍神様にお前は龍族ではないと言われてしまうのではないかと気が気ではなかった。

龍族でないと知ったら、どうなるだろう？雲上原を追い出されては、翠嵐には行く所がない。飛焰とも会えなくなるかもしれない。いや、もっと最悪なことがある。彼に見捨てられたら？龍族ではない翠嵐は何を抛り所に彼に縋ればいいのかだろう？

「今すぐ大人になればと言いませんよ。貴方はまだ14だ。私という杖に頼ってくれてかまわないのですから」

そっと飛焰は翠嵐を離すと、改まった様子で膝を折り、正式な跪拝の礼をとった。

彼は、時々こうやって翠嵐に跪く。なぜなら、飛焰は翠嵐の「家臣」だからだという。そういう時の飛焰はなぜだか少し遠く感じられて、翠嵐は嫌だった。翠嵐にとっては、彼は家臣などというわけの解らない存在ではなく、たった一人の家族だったから。

でも、翠嵐が文句を言くと、飛焰は「けじめ」はつけなければならぬと翠嵐をたしなめた。そしてきまって言うのだ。翠嵐様、覚えていてください。龍族は誇り高い一族。自分が一生を尽くして仕えるとした者にしか、けして膝をつかないのです、と。

「飛焰…」

翠嵐の不安を感じ取ったかのように、飛焰は、そっと翠嵐の手をとった。

「翠嵐様、この度はおめでとうございます」

「ありがとうございます」

彼はしばらく翠嵐をじっと眺めた。一連の動作はいつになく恭しくて、その瞳にこめられた熱い温度に、翠嵐はもじもじした。

「綺麗ですね。とてもよく似合っていますよ」

今の翠嵐は、これから行われる成人の儀式のために最大限に着飾っていた。青と碧を基調とした衣は、実際彼女の銀色の髪と金茶の瞳によく似合う。

けれど、いつも簡素で動きやすい服装を好む翠嵐には、大げさな衣装は気恥ずかしい気持ちが大きかった。

「私は貴方に言っておかねばならないことがあるのです。成人の儀が終われば、貴方は一人前の龍族となる。そうしたらもう、私の手をはなれてしまう」

翠嵐は突き放されたような気がして目を見開いた。それを察したのか、飛焰は少し口元に笑みを浮かべて翠嵐を安心させる。

「違いますよ。私はできる限りずっと翠嵐様のおそばにいるつもりです。そうではなく、私の力の及ばない部分もでてくるということです」

「たとえば？」

「契約です。特に気をつけねばならないのは人間と結ぶ契約です。龍族は誇り高き一族ですから、一度結んだ契約は違えてはならない。その契約には、当人以外は介入することが赦されない。だから人間は、まだ幼い龍を狙って騙そうとしてくる。そうやって騙された哀れな眷属を私は何人もこの目で見てきました」

雲上が原につれてこられてから一度も下界に降りていない翠嵐は、哀れな眷属とやらを見たことがない。ただ、人間に使役される龍族は獣のように鎖に繋がれ、誇りを傷つけられ、最後は自害すると聞いている。凄絶な話だった。

「わかったよ。わたし、せいっぱい気をつけるから」

「本当ですか？」

「うん、約束するよ」

「ほら、そうやって——簡単に約束すると言っては駄目といったでしょう」

「ごめんなさい」

翠嵐は急いで謝った。飛焰は翠嵐以外にはあまり見せない笑みを唇の端にのせる。出来の悪い生徒を甘やかすような、そんな温度で。

「もちろん、まだ貴方はすぐに雲上原を出るわけではない。だからそんなに構える必要もないのかもしれませんが」

翠嵐は素直に頷いた。まだ何の力も発現していない翠嵐は、自分との契約を望む人間などいるはずがない、ときめてかかっていた。けれど、いつかこの飛焰の心配が無駄にならないくらい、立派な龍族になりたいとの淡い願いは抱いている。

「がんばるよ。飛焰、ありがとう」

翠嵐は気づいていた。成人の儀式は、自立心旺盛な龍族といえども、普通親が最後までつきそうものなのだろう。親のいない翠嵐のために、飛焰はここで手を握っていてくれる。

「わたし、飛焰のこと大好き」

それは翠嵐の心の底から溢れ出た言葉だった。飛焰は不意打ちを食らったように目をはる。

「翠嵐様。貴方は本当に…」

その台詞の続きは、力一杯抱きしめられたので、翠嵐には聞こえなかった。

金蘭の夕暮れ

なんでこんなことになったのだろう、とその妖魔を見た時から翠嵐は後悔し始めていた。

「これに乗るの…？」

不満が声に表れていたのだろう、上からじろりと殺気だった視線が突き刺さる。あわてて翠嵐は亀よろしく首をすくめた。

「飛べないんだから大人しく乗れ」

翠嵐はあらためて目の前の妖魔を眺める。煤けた茶色の身体は全体が深い体毛で覆われていて、丸い目が埋もれないのが不思議なほどだ。驚をもっと巨大にし、醜悪にしたらこんな生物ができあがるだろうか。恐ろしいのはそのかぎ爪で、その爪にかかれば間違いない。翠嵐など一瞬で八つ裂きだ。

男は手慣れた様子で口にかませた手綱を掴み、馬に乗るような気軽さでひよいと飛び乗った。そのまま手招きされて近づくと、手荒に腰を掴まれ、引っ張り上げられて、気づけば妖魔の背中をまたいでいる。

まるで妖しい術のようだ。と翠嵐は思った。男は驚くほどに手際がよかった。翠嵐に口を挟む隙も故郷との別れを惜しむ暇も与えずに、手綱を引いて地を蹴った。

妖魔の背中は快適とは言いがたい。手も足も総動員してしがみつきのながら、翠嵐は顔の肉がすべて後ろに持って行かれる感覚を味わっていた。衣装のはためく音が五月蠅くて、そのうち千切れてしまうんじゃないかと心配になる。

妖魔は翼を力強くはばたかせてぐんぐん上昇し、雲を突き破って雲海の上へ出た。すると途端に下界は見えなくなり、雲上原の本当にてっぺんの部分だけがぼっかり顔を出している。みるみるうちにそれも点になってしまつて、翠嵐は心細くなつた。

今自分の腰を抱いている腕の力強さだけが救いだ。

「おまえが必要だ」、と祭壇に突如現れたこの男は言ったのだ。それはなんて、魅力的な響きだっただろう。

翠嵐は自分が龍ではないなどとは、みじめで言い出せなかった。けれど代わりに、翠嵐がまだ幼く何の役にも立ちそうにないことを説明しても、それでも男は譲らなかつた。「対価は払う。結界を抜けるまで一緒に来て欲しい」と、男は頼んだ。

男いわく、男は山の禁域で狩りをするうちに、この雲上原に迷い込んでしまい、出られなくなつてしまつたらしい。雲上原は、閉鎖された土地である。下界の者は、入ることはできても出ることは赦されない。張り巡らされた結界を抜けるには、翠嵐がもつ龍の玉ぎよくが必要なのだ。

翠嵐は悩んだ。儀式を経て自分が龍族でないことが解つてしまつた今、どのみち雲上原にはいられない。なにより、飛焰に会うのが怖くて仕方なかつた。あんなに翠嵐を大切にしてくれたのに、龍族でないと解つたら、どんなにがっかりするだろうか。どんなに悲しむだろうか。——合わせる顔がない。

だからといって、飛べない翠嵐が、一人でこの陸の孤島である雲上原から出るのは無理だろう。この男の申し出は、誰にも知られずに雲上原から逃げ出す絶好のチャンスといえる。

結局、翠嵐は逃げることを選んだ。

「私を下界まで送り届けてくれるなら、協力する」と警戒しながらも口に出すと、男は頷き、契約の儀式をしようと持ちかけた。困ったことに、翠嵐は契約の儀式の仕方を知らない。しょうがないので、男に教えられたとおりの言葉を復唱した。

「リュウジンノシユクフクヲウケシワガヨクカ。トワノサカズキヲトモニユケ——」

すべて言い終わると、男はつかつかと歩みよって腰を掴み、強引に顔を寄せてきた。そして、慌てふためいてのけぞる翠嵐の唇に文字通り噛み付いた。髪の毛一筋ほどの躊躇いもなかった。びっくりしたその瞬間、翠嵐は胸の奥がなぜか急に熱くなって、頭の中が一瞬真っ白になった。

気づいたら、男に身体を支えられていた。目を白黒させている翠嵐は滑稽だったに違いない。「契約は完了した。これで、おまえは俺の龍だ」そう言って男は唇を歪めた。

龍ではないのに、と翠嵐の心が罪悪感でずきんと痛む。なんだから、とんでもないことをしてしまった。そんな予感があった。あの唇の温かい感触を味わった瞬間、たしかに感じたあの高揚は、なんだったのだろう。飛焰の声が蘇る。

『特に気をつけねばならないのは人間と結ぶ契約です』

けれど、自分は龍族ではなかったのだから、龍族の掟に縛られることもないはずだ。翠嵐は不安にゆれる自分の心をなだめすかすと、さっさと先に行く男の後を追ったのだった。

翠嵐が色々と思い出しているうちに、雲上原の結界は無事抜けたようだった。白い雲海と群青の空は世界をどこまでも二分している。これなら天地がひっくり返ってもきつとわからないだろう。翠嵐は血が騒ぐような感覚を覚え、妖魔から飛び降りてしまいたい衝動に戸惑った。こんなことは初めてだ。

男は妖魔に乗ることになれているらしい。でないと、この吹きすさぶ風の中で落ち着いて話すことなどできやしない。

「とりあえず、ここを少し北にいった金蘭に降りる」

翠嵐は金蘭がどんな都市なのか、まったくもってわからなかったが、何か言葉を口にさせる状況ではなかったので黙っていた。男はそれを了承ととったようだった。

「そんなにきよろきよろするな」

男は呆れて軽く翠嵐の頭をはたいた。翠嵐は目をぱちくりさせて頭をさする。くるっと大きな金茶の瞳を上に向けると、男が再び溜め息をついた。

とりあえず、金蘭は翠嵐の予想を遥かに上回る大都市だった。これまでの人生で見た人数を遥かに上回る量の人で往来が賑わっている。足の短い馬が荷台をひきずって通り過ぎる。噓せ返るような獣の匂い。乾いた土の匂い。そして汗の混じる人の匂い。

一気に流れ込んで来て、翠嵐を興奮させるのには十分だった。

「すごい！いっぱいヒトがいる！」

「あたりまえだろう。ここは金蘭だ」

男は、人ごみに埋もれそうになった翠嵐の首ねっこを引っ掴んで救い出した。妖魔がその様子を見て、馬鹿にしたように、ぎょろりと黄色く濁った目をめぐらせる。

妖魔を内心こわごわ睨みつけてから、翠嵐は男を振り仰いだ。

「ねえねえ、えーっと……おじさん？」

絶句したような、奇妙な沈黙がおちる。翠嵐は男の名前をすっかり忘れていた。

「…私の名は昴流だ。そう呼べ」

「なら、わたしの名前は翠嵐だよ。今からどこへ行くの？」

「もうすぐ日暮れだから、とりあえず宿に行く。翠嵐、きよろきよろするな、私の手を離すな」

「なんで？」

「物取りに狙われたくなければ大人しく言う通りにしろ」

男——昴流は殺気立った目で翠嵐を串刺しにした。強引に翠嵐の右手を左手で掴み直すと、右手に妖魔の綱を引いて、さっさと脇目もふらずに歩き始める。翠嵐の足とではコンパスが違いすぎて、翠嵐は殆ど小走りになった。

昴流がかき分けて進む人々の群れが、じろじろと翠嵐を眺め回していく。何かおかしいのだろうか、と翠嵐は落ち着かない。上等な着物を纏った自分が、どこかの貴族と間違われて目立っていることも知らずに、首を傾げた。

昴流は急いでいるようだった。翠嵐の足が弱音を上げ始めたころ、やっと、龍の寝息でも簡単に倒壊してしまいそうな程に古びた宿へ辿り着く。もっと街を探検してみたくてうずうずしている翠嵐をさっさと宿に押し込めると、絶対に宿を出るなと釘をさして、どこかへ出かけて行った。

翠嵐はぽつんと狭い部屋に残された。昴流が銅貨を三枚払って手に入れた部屋は、寝台が1つと椅子が1つあるだけの簡素なものだった。翠嵐が腰掛けると寝台は悲鳴をあげて軋んだ。

「今にも壊れそう…」

寝台の上には檻褌布がかろうじて乗っかっていた。指でなぞると、

肌が痛くなるくらいごわごわしている。すぐに部屋の観察にも飽きて露台に出ると、そろそろ空が橙色に染まり始めていた。

翠嵐は思わず歓声をあげた。

地上を這いつくばっていては見えない景色が広がっていた。押し込めるようにして瓦葺きの家々が立ち並び、夕日を受けて蒼い瓦が鈍く光る。ところどころに、たなびく煙は、人々の息づく証。赤や緑、青や黄色の色とりどりの旗が翻り、家と家の間に渡した綱に衣が揺れていた。客寄せの声に混じって夕暮れの寺の鐘が空を渡る。

そこで初めて、翠嵐は実感した。ここは、もう雲上原ではないのだと。翠嵐はひとりぼっちで、また八年前に逆戻りしてしまったのだ。

みるみるうちにぼやけていく景色をそのままに、それでも、不思議と翠嵐は祭壇の前で泣いた時のように絶望はしていなかった。

それは、この景色がどこか懐かしい気がするせいかもしれないし、あの男——昂流の存在があるからかもしれない。

背中合わせ

翠嵐のお腹が空腹を訴えてよじれてきた頃、昴流は帰って来た。その服では目立つだろうと言って、翠嵐に新しい服を差し出す。

昴流が黙って部屋から出て行ったので、慌てて翠嵐は着替えようとした。しかし、困ったことに、着方が解らない。いつも雲上原では衣は侍女に着せて貰っていたし、雲上原にくる前は子供用の簡素な服しかきたことがない。

「もう着替えたか」

結局、扉の外から昴流に声をかけられた時、翠嵐は慌てて頭から一枚の布をかぶり、かろうじて腰に紐を巻き付けただけの状態だった。

「ううん…まだ」

「なんだ、何をとりとろしているんだ」

「それが、着方が解らなくて」

扉の外で、溜め息が聞こえた。

「入るぞ」

翠嵐が言葉を失っているうちに、昴流はさっさと扉をあけて中に入ってきた。表情1つ変えず、散らかった布の中央に座り込む翠嵐をじろじろ眺めると、「おまえは蓑虫か」とこぼした。

翠嵐は恥ずかしさと情けなさで、かあ、と顔が熱くなるのを感じた。

「ごめんなさい」

「いや、私の気が回らなかった。おまえは初めてなんだから、仕方ないだろう」

昴流は手早く翠嵐の衣を手にとると、上から重ねていった。

意外に細やかな手つきで、穴に翠嵐の手を通させ、紐を結び、きちんと衣服を着せてくれる。最後に翠嵐の長い髪の毛をとると、なんと簡単に編み込んで結ってくれた。

青銅の鏡で確認すると、翠嵐にはとても真似できないくらいきっちり結われている。翠嵐は心底感心しきって昴流を見上げた。

「昴流って手先が器用なんだね」

「これくらい、自分でできるのが当たり前だ。一人前の女ならな」

半人前、と暗に言われた気がして、翠嵐は口を開けたまま何も言えなかった。

「あのね、わたし、江南の方に行きたいの」

翠嵐は、恐る恐る切り出した。酒に酔った男たちの合唱で、翠嵐の声などかき消されそうだ。聞いたこともない尻上がりの調子で、陽気な音階。

翠嵐のお腹がついに音をあげてぐう、と主張したのを聞いて、昴流が黙って連れていってくれたのは宿の一階だった。油に汚れた木の扉を押し開けると、そこは金蘭の荒くれ男たちが飲み交わす居酒屋になっていた。

「なぜ」

昂流は驚くでもなく、淡々と口に粥を運ぶ。翠嵐の目の前にも、同じ粥が用意されていた。木の椀に注がれた粥は自分の顔がうつるくらいに薄く、具は雑草みたいな草が少し入っているだけだ。

翠嵐は最初は試しにちよっぴり、それをすすする。味は少ししょっぱい。でも、あったかくてなんだかほっと安心する。

「わたし、昔は江南の小さな山里に住んでいたの。事情があって、もう雲上原には戻れないから。だからそこに行きたいんだけど、行き方を教えてくれる？」

「一人で行くつもりなのか」

うん、と翠嵐は頷いた。ここまで流されるままに昂流についてきてしまったが、この宿も、このご飯も、ただではないということ。翠嵐だって知っている。本当は、誰かについてきて欲しかったけれど、護衛を雇うようなお金を翠嵐は持っていなかった。

「無理だな」

けれど、翠嵐の勇気を振り絞った決心を、あっさり昂流は切り捨てた。

「なっ、なんで」

「おまえは世間知らずだ。ここから江南まで、何日かかるか知っているか？道は解るのか？江南に行くには、河を渡らなきゃいけない。河の渡り方を知っているのか？」

翠嵐はぐうの音もでない。ほら見ろ、と静かな漆黒の瞳が言っている。

「でも、わたし、それじゃあどうしたらいいか…」

途方にくれて俯くと、情けない顔をした自分が粥にうつっていた。その顔がぼやけそうになって、慌ててまたたく。

「別に、一言言えばすむ話だろう。連れて行ってくれと言えればいい」「連れていってくれるの!？」

昴流はいつの間にか粥を食べ終えていた。翠嵐を待つ素振りもみせず、さっさと財布を取り出して席を立つ。翠嵐は慌てて残りの粥を口に流し込むと、跳ねるようにして昴流のあとを追った。

「たまたまそっちの方向に用があるだけだ。それに、対価は払うと言っただろう」

昴流は部屋に戻ると、にこにこしている翠嵐に素っ気なく言い捨てた。それでも、翠嵐は全然かまわない。

「よかった。ほんとは、一人でとっても不安だったの。だから、昴流みたいな人が一緒にいてくれると、とっても心強い」

昴流は、素人の翠嵐がみてもかなり旅慣れていた。

最初、お金がないわけでもなさそうなのに、なぜこのような古い宿を選んだのか不審に思っていた。聞いてみたら、逆に質問で返された。銅貨3枚は安いと思うか、と。

翠嵐は銅貨3枚がどのくらいの価値があるのか解らなかったが、聞けば中級程度の宿がとれる値段であるらしい。この宿は、部屋は良くない代わりに妖魔の管理が手厚いことがうりなのだ。

旅をするなら、自分よりも足となる妖魔を大切にするのが普通だ、と昴流は教えてくれた。

そして、便利な妖魔を連れた旅人が往来をみても滅多にいないことに、翠嵐は気づいている。

「昴流みたいな、ね…」

昴流が無表情に呟いた。

お腹が満足すると、次は瞼が自然と落ちてくる。

翠嵐はいそいそと寝台を整えると、どうぞ、と昴流に指し示した。自分は長椅子に寝そべって、最初に来ていた衣服を掛け布団の代わりにひき被る。

「何をしているんだ。おまえは風邪でもかかって私を困らせる気なのか？」

腕組みをした昴流が、呆れた顔で翠嵐を見下ろした。

「でも、寝台は一つしか」

「一緒に寝れば良いだろう。おまえみたいにちっちゃければ、二人寝ても十分おさまる」

そうして、何か言う暇もなく昴に抱え上げられた翠嵐は、驚いてじたばたもがくうちに、ぱい、と寝台の上に放り出された。

どうもこの昴流という男は強引だ。

まるで物みたいに扱われた翠嵐は文句の一つも言いたかったのに、ずっと切れ長の瞳にみつめられると、言葉につまってしまった。

瞳の中に閉じ込められた漆黒の闇に、銀色の星のような虹彩が煌めいて、冬の夜に見上げた雲上原の空みたいだ。つめたくて、厳しくて、でも限りなく澄んでいる。果実の砂糖漬け並に甘さを含んだ、

飛焰の瞳とは大違い。

結局諦めて、翠嵐はちんまりと寝台の上で丸くなった。

檻褌布はごわごわしていたが、風は通さず意外と温かい。昴流はちゃんと布の半分を翠嵐に分けてくれて、寝台の中央で背中合わせになった。

触れた背中から伝わる温もりに、幼い頃に飛焰と一緒に寝たことを思い出す。

翠嵐は悪い夢をみると、きまって飛焰の寝台に潜り込んだものだった。

仕事から返ってきた飛焰は翠嵐が眠れるまで、腕の中で色々なお話をしてくれた。ヒトの世界の話から、翠嵐の生まれるずっと前の雲上原の話まで。飛焰はびっくりするくらい物知りで、おまけに話も上手いのだ。

翠嵐はその寝物語がたいそう好きだった。

それでも、翠嵐に月のものが訪れてからは、飛焰も一緒に寝てくれなくなった。どんなにねだっても、あなたも一人前の女性になったのですから、とちよつと困った顔で、でも頑なに。

いいですか、女の人は簡単に男の人と一緒に寝台に横になつてはいけません。厳しい顔をした飛焰が心の中で説教を始めたが、気にしないことにした。

ここは金蘭だ。もう雲上原ではないのだから。飛焰のお説教も、きつと二度と聞けないのだから…。

斜陽

翠嵐はぐぐぐ、と齒を食いしばって耐えていた。その背には麻ひもで干し飯やら薬草やらをまとめた包みがくくりつけてある。両手にはこれまた水の入った革袋と、武器の入った布袋。必死に踏ん張った足が重みで地面にめり込みそうだ。紐が柔らかい肌に食い込んで、すでにあちこちがひりひりと痛い。

「どうした。もうお手上げか？」

「だっ、大丈夫だよ」

投げかけられた問いに、慌てて翠嵐は笑顔をつくった。翠嵐の何倍もの荷物を担いでも涼しい顔をした昴流が、長身を折り曲げて翠嵐の顔を覗き込む。

「ふうん？根性はあるみたいだな？」

感心しているのか、呆れているのか。はたまた面白がっているのか。翠嵐には解らない。

「だって、少しでも昴流の役に立ちたいんだもん！」

「まあいい。自分の言葉には責任を持てよ」

うん、と翠嵐は力強く頷いた。

そうなのだ。対外的には昴流が翠嵐を苛めているとしか見えないこの状況は、翠嵐の望んだものだった。

旅立ちはや早い方がいいということ、昴流は朝起きると早速、金蘭の中心街へ買い出しに出かけると言って宿を出た。おまえは待つ

ておけと言われたのを、翠嵐が自ら荷物持ちになりたいと志願したのだ。少しでも昂流を手伝いたいと願って、足手まといだと渋る昂流に無理矢理ついてきた。

雲上原で育ち、それこそ箸より重いものを持ったことのない翠嵐は、少しばかりの荷物を持っただけでも途端に歩みが遅くなった。無言で次々に渡される荷物に内心で冷や汗をかいても、「どうした？ さては重いんだろう？」と優しく――ほぼ猫なで声に近い――聞かれても、「大丈夫」と最早意地になって翠嵐は答え続けていた。

昂流は翠嵐のぎこちない笑顔を一瞥してから、端正な顔を少しも動かさぬまま、興味をなくしたようにまた歩き始める。翠嵐もよしよと荷物を背負い直して後を追った。

整地されていない道は、少し風がふくと簡単に砂埃が舞い上がる。金蘭は海に近い風の街だ。喧噪の合間に、ちりんちりん、と店先の玻璃細工が可愛らしい音で鳴き、疲れを慰めてくれた。

汗が目に入る痛みに目をぱちぱちさせながら、翠嵐は黒い背中をじっとみつめる。くすんだ埃っぽい人ごみの中で不思議とその姿は浮いてみえた。黒地に、裾には銀糸で薄い模様の入った長い深衣を着た、すらりとした体軀。筋骨隆々とはほど遠く、力自慢の武官には見えない。かといって凡庸な市民に見えるわけでもない。

肩に背負う荷物の重みに負けず、背筋はぴんと伸び、歩き方に無駄がなかった。ただ者ではない洗練された雰囲気は、例えるならば、どこかの国の軍師といった風情。

一体、彼は何者なのだろう。考えてみれば、翠嵐はそれすら知らないのだった。

「お兄さん、今宵の宿はいかがかしら」

翠嵐が少しでも遅れると、たちまち彼はきらびやかな女性たちに囲まれて袖をひかれる。

その女たちの耳元へ囁き返す声は、何を言っているのか解らない。

女たちが顔を赤くして、きやらきやらと笑いあうのがみえるだけ。女たちの大胆に開けた胸元の白さが眩しい。一瞬昴流の横顔がちらり、と見えた。涼しい口元が笑っているみたいだった。

ただ、なんとなくそれ以上は恥ずかしくて見ていられない気がして、翠嵐は慌てて3歩の差を縮めて一生懸命にその足にかじりつく。女たちは、顔を真っ赤にして息をつく翠嵐の必死の形相にたじろいで、白粉の香りだけ残してまたねと言って去っていった。

「なんだ？」

少し驚いたような昴流の声に、やっと自分が邪魔をしてしまったのではないかと思ひ当たる。気まづくなった翠嵐はことさらはしゃいだ声をあげた。

「つ、次はどこへいくの!？」

「次は、葉屋だ」

ぽん、と頭にのせられた手が、次第に翠嵐に重みをかける。押し込められるようにして、顎が首にくっつき、翠嵐の視線が地面におちた。昴流の顔はみえない。

「昴流! おも、重いよっ」

困惑した翠嵐は抗議の声をあげた。

「やっと言ったな」

手がすつとどけられると同時に、突然肩が軽くなる。え、と思つて見上げると昴流がいつの間にか翠嵐の肩の荷を取り上げていた。

「おまえは本当に変わった龍だな。誇り高い龍は、普通荷物持ちなんて下僕のような真似はしないぞ」

それは、翠嵐が龍族ではないからだ。と、翠嵐の心に一瞬暗い影が落ちたが、すぐに心のはしに追いやった。

「ま、待って！わたし持つよ！？」

「意地はってずっと重い物を持っていると腰を痛めるぞ。それともこれ以上、私が子どもに荷物を持たせる鬼畜だと周りに知らしめたのか？」

「で、でも…」

きつい言葉にたじろぐ。

けれど、何かしてないと、罪悪感で潰されそうで、落ち着かないのだった。翠嵐は龍族でもなんでもない。ただ龍玉を持っているだけの何もできない子どもだ。

しょんぼり俯く翠嵐の頭に、棒読みの声が振ってくる。

「こんなに暑いとやっていられないな。久しぶりに氷菓子でも食べたい気分だが、荷物が多くて買ってくるのが面倒だ」

翠嵐がぽつと顔をあげると、目の前に銅銭が差し出される。

「買って来てくれるか」

「うん！」

勢い良く頷くと、翠嵐は喜び勇んで駆け出した。

「本当に変わった奴だ…」

その小さな背中を見て、昴流が小さくぼやいた。

そろそろ陽射しが肌に痛くなってくる頃とあり、氷菓子なのぼりはあちこちで見つかった。名物の氷菓子は、金蘭を見下ろす蒼梧山の奥地から、毎朝運んでくる氷を用いるのだという。

初めて見る氷菓子は、たちまち翠嵐を夢中にした。ひんやり硝子みたいな氷の中に、鋭い光の欠片を閉じ込めて、きらきらしている。翠嵐は、興奮で氷を溶かさないと心配になりながら、紅や橙、黄に碧と色々とりどりの氷菓子から、赤いのと黄色いのを1つずつ選んだ。宝石のように小さな容れ物に入った氷菓子は、すぐに汗をかき出したので、翠嵐は急いで来た道を小走りに引き返す。その途中、ふと目にとまる物があった。

「ねえ、昴流。あれは、なあに？」

待ち合わせの薬屋に戻ってくると、すでに昴流は買い物を終えたあとのようで、柱にもたれかかって待っていた。指差す先をみて、すこし眉をひそめる。

「あれか。あれは、新しい廟だな」

「龍神様を祀っているの？」

「…見てみるか？」

道に面したところに紅い堂々とした門構えがあり、頻繁に人が出入りしている。昴流とともに中を覗き込むと、確かに立派な廟があった。氷菓子を口に運ぶのも忘れてうわあと思わず歓声をあげた。社の中には、麦穂を模した金銀の飾りが至る所にある。中央には立派な祭壇が構え、布や穀物の供物で溢れかえっていた。

そこで、あれ、と翠嵐は首を傾げる。祭壇の上に鎮座しているの

は、翠嵐のよく知る龍神様の御姿ではない。優しげな瞳をして手を差しのべる女性だ。翠嵐の知る限りでは、こんな神様は龍神様の家臣にもいないはず。

「龍神様は？」

見慣れたものがそこにある不安がこもっていたのだろう。すぐ前で拝んでいたおじさんが振り返った。

「嬢ちゃん。まだ龍神なんぞ信じているのかい。今は晶慶様の時代だよ。皇帝陛下もこの神様に夢中だって話だ」

「そんな…」

驚いて何も言えずにいる翠嵐に、親切なおじさんは焼香を何本か分けてくれた。緑色の見慣れない焼香をじっとみつめる。横から鼻流が焼香を何本か抜き取り、火をもらって祭壇に備えた。

「知らなかったのか？」

特に驚いた様子もない。自分だけが知らなかったのだ。なんだか騙されたような気持ちになって、翠嵐は唇を噛んだ。

「龍神様は…嫌われているの？」

「そうだな。龍神は慈悲を知らない。その尻尾は嵐を起こし、怒りは雷となり、息吹で雪を降らせる。破壊の限りをつくし、人の無力を嘲笑う」

「龍神様が慈悲を知らないわけがない。作物は雨がないと実らない。嵐がなければ大地は潤わないのに」

「人は何かに怯え、畏れているのが嫌になったんだよ。力で従わせる神よりも、優しく包み込む神の方が良い。加えて龍神の眷属であ

る龍族は傲慢だ。誇り高く融通がきかず、高慢で恐れ知らず。人間にはとても扱いにくいだろうな」

悔しかった。確かに、翠嵐の知る龍族は、矜持が高く、あまり他人に干渉されるのを好まない者が多かったが、けしてそれだけではないのに。相手をなかなか認めない分、一度相手を認めれば、その情は炎よりも熱く海よりも深いと聞いている。飛焰のように、優しく人当たりの良い龍だっているのだ。

「皆が皆、傲慢なわけじゃないよ…」

「それは人だって同じだ。今も龍神を信じる奴らもいる」

翠嵐はそれ以上何もいえなかった。信じる神様を決めるのは自分の心だ。無理矢理強制するものではない。

「まあ、私自身はこの神は好きになれないな」

昂流は喧嘩を売るように腕組みをしたまま神像を睨み上げる。何かを見極めるように、双眸をすがめた。

「どうして？」

「目的が解っているのにわざわざ騙されるのは癪だろう？」

「どういうこと？」

謎めいた笑みを浮かべて、昂流はそれ以上答えてくれなかった。

龍と獣

市での買い物が終わって気づいた時には、すでに寺院の鐘が鳴り終わり、丸い月が雲間から顔を覗かせていた。昴流は、翠嵐を金蘭の真ん中を突き抜ける大通りまで連れて行った。夜も眠らぬ街の喧噪に翠嵐が目を奪われていると、唐突に目の前の背中が立ち止まる。しかめられた眉の下、昴流の厳しい視線の先を追うと、細い路地裏にするりと人影が滑っていった。

「悪いが、私は少し用ができたから、先に食事をとっておいてくれ」握っていた手と手が離れた。昴流は翠嵐に銅銭を何枚か渡し、引き止める間も与えず狭い裏路地の向こうに姿を消した。

掌がやけにすうすうする。置いて行かれたような気持ちになったが、しょうがないと自分を奮い立たせて目の前の店の中に入った。一人で店に入るのは初めてで、心細さが翠嵐の身体を少し強ばらせた。店内を見回して、空いている椅子に座る。すぐに注文を聞かれたのでつかえながら答えたのち、そのまま何をするでもなく縮こまっていた。

その声が耳に飛び込んできたのは、だから偶然だった。あるいは『龍族』という言葉に、自分が思う以上に敏感なのかもしれない。

「龍族を捕まえると面白いもんが見れる」

「どういうことだ？」

翠嵐の席のすぐ向かいで、好奇心を抑えきれないといった様子の男たちが、酒を囲んで大声で話している。

「龍の奴ら、最初はな、人間を見下してやたらと馬鹿にした態度をとるんだよ。それをみっちり痛めつけて、とにかくしつける。何が何でも、膝をつかせるんだ」

「どうやって？」

「一番良いのは、子どもだな。龍の子どもを捕らえて、そいつを痛めつけてやる」

「なるほどなあ。龍は情が深いと聞いたことがある」

「あいつらが初めてご主人様、と言った時の悔しそうな目といったら」

「力を失うと、人型を保てなくなって龍の姿に戻るんだろ？」

「そうさ。それで、轡をはめられて、きいきい五月蠅く鳴くんだけ」

「人型の時には高慢ちきで減らず口をたたくっていうのに、本性はまるきり獣だな」

「良い気味だ。まったく、龍神さまも形無しだ」

げらげらと男たちの笑い声が重なった。

すう、と血の気が引いていくのに、心臓だけがどくりと波打った。哀れな龍の末路を、酒の肴に、面白おかしく話しているのだ。目の裏がかつと真っ赤に染まったと思ったら、翠嵐は男たちの前に立って、ぱんと掌を机に叩き付けていた。

「龍族は獣なんかじゃないもん！あなたたちに、侮辱されるような存在じゃない！」

自分でも、どこから出たのかと思うくらいの大声に、店が一瞬静まる。そこで翠嵐は、はっと我に帰った。

男たちが目を丸くしたのは少しの間で、すぐにその目が油断なく細められる。ぴゅい、とはやすような口笛があちこちであがり、男たちは、それに応えるように気怠そうに腰をあげた。がっしりした上背は立ち上がると相当な迫力で、勢いのそがれた翠嵐は一步後さじった。男はそのまま翠嵐が逃げるのを許さず、ぐい、と翠嵐の細肩を掴む。無骨な指をかけて、翠嵐の顎を無理矢理持ち上げた。

「何をするの！」

じたばたもがく翠嵐を検分するようにじろじろ眺め回す。視線が服の中にまで入り込んでくるようで、嫌悪で鳥肌がたった。

「威勢がいいねえ、お嬢ちゃん。やけに綺麗な面してると思ったら、さては龍の子どもだな。この銀の髪といい、碧の目といい、珍しい色だ」

「違う！…わたしは龍じゃない」

自分で言った言葉が自分を傷つける。翠嵐のその躊躇いが、男たちの疑念を更に深めたようだった。

「じゃあ、なんだってそんなに龍族を庇う？」

「それは…だって、龍神様を祀る一族だから」

じたばたもがいても、男たちの前ではかなしいくらいに翠嵐は無力だった。顎を持ち上げられ、いいように視線にさらされる屈辱に、目尻に涙がうっすら浮かぶ。悔しくて、翠嵐はきつ、と精一杯男のひげ面を睨み上げた。

「おい、どうする」

「近くに親もいないようだしな。こっちの準備もないまま、親にみつかると後が面倒だ。龍かどうかは、連れ帰ってから調べる方がいい」

「別に龍じゃなくなたって、使い道はいくらでもあるさ」

使い道。翠嵐のことをまるで道具みたいに言い合う男たちに、翠嵐は怒りも冷えて固まった。分厚い掌で口を塞がれると、あつという間に軽々と抱き上げられる。ばたつかせた足が男の腹にあたって、男は薄笑いを浮かべただけだった。男たちは酒場の主人に銭を払って出て行く。好奇や哀れみの視線が向けられても、酒場の誰も彼らを止めようとはしなかった。

今更ながらに翠嵐は自分の行動を呪った。どんなに幼い妖魔でも、自分より大きな妖魔に戦いを挑まないのに。自分みたいな、世間知らずで親の庇護すらもない子どもが、たてついていい相手ではなかった。なんであんなに、許せない気持ちになったのだろう。

——助けて！助けて誰か…！

こんな時にいつも呼べと言われた名は、もう呼べない。向き合うことが怖くて、飛焰から逃げたのは、翠嵐自身だ。

——助けて、昴流…！

結局、混乱した翠嵐が呼んだのは、つい数日前に知り合ったばかりの男の名だった。その名を呼んだところで、どうにもならないと解っている。

「おい。私の連れを離してもらおうか」

落ち着いた低い声が飛び込んで来て、翠嵐は耳を疑った。ち、と男が舌打ちする。乱暴に翠嵐を下ろすと、後ろの男にむかって突き飛ばした。よろけた翠嵐をすぐ後ろの男が羽交い締めにする。

昂流だった。彼が、翠嵐の目の前、男の向こう、往來の真ん中に立って静かにこちらをみつめていた。早くも野次馬が集まり始めている中、余裕すら感じさせるゆっくりとした動きで、腰の長剣を抜く。すつと上段にかまえ、全身黒い装束に包まれた身体が沈み込んだ。対する男がごくり、と息をのんだのが、翠嵐にも聞こえた。

「おまえら、援護しろ！」

その言葉を合図に、翠嵐を捕らえる以外の三人の男が得物を手に飛びかかる。獲物を捉えて細まった昂流の切れ長の瞳が、薄闇の中の街の灯りをうけて煌めいた。

それはまるで演舞だった。昂流の剣先が、男の剣を跳ね上げ、衣を切り裂く。決まった型などない。流れる水のように変幻自在に姿を変えて、昂流の剣は男たちを弄んだ。

昂流の身体が男たちの間を風のように走り抜けただけで、男たちは次々薙ぎ倒された。風はすぐに翠嵐の前に辿り着く。切先が翠嵐の前でぴたりと止まる。

「おまえも命を失いたいか」

自分の背後の男に向けられた言葉なのに、翠嵐はその眼光におののき、そして魅入られた。なんてつよい、強者の言葉。自分を抑える太い腕が、震えている。この人も、怖いんだ。

ひい、と裏返った悲鳴をあげて、男が転びそうになりながら逃げて行く。昂流はそれを黙って見送ると、倒れた男の衣で剣の血糊をぬぐって鞘におさめた。鞘におさめるまでが、一つの流れのようだった。思わず溜め息をついた野次馬が、昂流の一睨みで散り散りになる。昂流は翠嵐を振り返ると、行くぞとぶっきらぼうに言って左手を差し出した。

「なぜあんなことになった」

怒鳴りつけるでもなく、静かに問われ、かえって翠嵐は見捨てられる予感に怖くなった。

「ごめんなさい」

翠嵐もあの一瞬、自分の身体を突き抜けた激しい落雷のような怒り——衝動を、うまく説明できないのだった。今どこを探しても、そんな感情は残っていない。

「龍族のことを馬鹿にされたの。そしたら…、堪えきれなくて、怒鳴ってしまっただけ」

昂流はそこで、呆れたような、顔をしかめるような妙な表情をした。

「喧嘩を売るなんて、愚かな者のすることだ」

「ごめんなさい！」

翠嵐はぎゅっと目をつぶる。なんで、あんな考えなしのことをしてしまったんだろう。後悔がぐるぐると頭の中で渦を巻いて、自己嫌悪の海に突き落とされた。結局、昂流の足を引っ張ってばかりではないか。

「あいつらがどんな話してたのかは大体想像できる。……おまえはこんなに小さいのに、ちゃんと龍なんだな」

その言葉は、怒りというよりは、しみじみとした響きを含んでいた。

「え」

「龍はたとえ子どもでも怒らせてはならないという。獣は自分より大きいものを恐れるが、龍は恐れないから」

ぽん、と頭に手をのせられてぐしゃぐしゃとかき回すように撫でられた。荒っぽいやり方。なのに、その手が離れてしまうと、不思議と翠嵐は名残惜しい気分になった。

「悪かった。酒場にこんな小さい子どもを一人で放り込んだ私の不手際だ」

どうやらそれを気にして、昂流は用事を切り上げて戻って来たら

しい。

「いいか。勘違いするなよ。もう二度と自ら危険を作るようなことはするな。自分の身は自分で守れ。今度は、見捨てる」

「うん」

翠嵐はこくりと頷いた。言われなくとも、翠嵐もあんなことになるなら感情を落ち着かせる方がまじだと思った。昂流が助けてくれなかったら、今頃翠嵐は彼らに囚われて恐ろしい目にあっていただろう。

「ありがとう、昂流」

ああ、と昂流は頷いただけだったが、翠嵐は微笑んで、繋いだ手に力をこめた。

裏側

金蘭。かつて王国の都として発展した街は、帝国の支配下に置かれてもその輝きを失うことはなかった。大河の河口近くという交通の要所にあるため、大陸の内陸部と外縁部の商人が行き来して金を落として行く。

良くも悪くも商人たちによって成り立つ街であるので、商人たちによって組織される商連合会は、高い税金と引き換えに自治を得ることができた。そのおかげでというべきか、金蘭を治める諸侯、雁章しょうの面倒事といえば、年に何回か訪れる帝国からの使者を歓待し、ご機嫌を伺うことくらいだ。

雁章は、つい先刻その皇帝からの勅使をなんとか送り出し、やっと面倒事が片付いたとほっとしていたところだった。そこにまた家臣がやってきて、謁見を申しでる者がいると言う。

「何、謁見だど？ そのような者、放り出してしまえ」

全く、この家臣は長年仕えてきて主人の心も解らないのだろうか？ 雁章は指で小刻みに卓子を叩き、苛立ちを隠そうともしなかった。「それが、龍族の者と申しておりますして」

遠慮がちに、家臣が言葉を繋ぐ。

「何？」

龍族ときいて、雁章ははたと考え込んだ。立派に整えたひげを片手でしごきながら、頭の中に打算がよぎる。

「女か？」

「はい。願いを聞き届けて貰えば、どのような礼もすると。かなり切羽詰まった様子にみえました」

なるほど、家臣も馬鹿ではなかったようだ。雁章が何を望むのか、きちんと心得ているものとみえる。

「よい。通せ」

雁章は先ほどの怒りなど忘れて、すっかり機嫌を直した。

龍族。誇り高きその種族は、容姿が揃って麗しいことでも有名だ。かつては王国の貴族と結びつき、権勢を恣ほしごままにしていたと聞くが、帝国の支配が始まってからは迫害が強まった。しかし端麗な容姿から、今は奴隷として多く後宮に入れられているという。

「お連れしました」

通された女は叩頭すると、頭から被っていた黒い布を取り去った。雁章はぐくりと息を飲み、その姿に釘付けになる。黒檀のように艶やかな髪と水も弾きそうな瑞々しい白い肌。そして何より——その揺らめく炎の色を宿した瞳。

「焰えんと申します、雁章様。お願いがあつて参りました」

その女は、睫毛を伏せて婉然と微笑んだ。

飛焰は内心、焦る心をなだめすかすのに必死だった。言葉と微笑みが現実を上滑りしていく中、己の龍玉を、袖の中でそつと握りしめる。微かに主と繋がるそれが、彼の主がまだ無事であることを教えてくれた。それだけが唯一の救いだった。

つい数日前。荒らされた無人の祭壇を見た時、飛焰の心は凍った。今回の儀式の一部は、翠嵐の臣下である飛焰に任せられていた。十五年前の悲劇を繰り返さないためにも、飛焰はかなり慎重に準備を進めた。与えられた権限の中で、精一杯の態勢を整えたはずだった。

怯える主に不安を感じさせないよう、笑顔で送り出した後すぐ、儀式の危険についてもっと言っておくべきだったと後悔した。夏至に行われる龍族の成人の儀式は、一部の人間たちにはとても有名なものである。親の庇護下にある龍が、初めてその腕を離れる日。そして、雲上原の中でも最も下界に近い廟までやってくる日だ。成人の儀式に向かった龍を助けることは、一族といえども許されない。稀ではあったが、そこに目をつけ、未熟な龍の誘拐を企む人間が現れる場合がある。

嫌な予感はいった。いっこうに帰ってこない、彼の小さな主。

長老の制止を振り切って洞窟に足を踏み入れてみれば、あちこちの結果は弛み、警備の龍たちは血を流してぐったりと倒れていた。

飛焰は血相を変えてすぐに搜索の手配をし、自身も女に化けて野に降りた。翠嵐をさらった者がどのような者かは解らなかったが、早く助け出さなくては手遅れになる。河を越えればすぐに江南だ。対龍感情の格段に悪い江南に入られてしまつては、飛焰もうかつに手を出せない。

普通の龍ならばまだいい。彼女はその特殊な生まれ故に、龍としての知識もろくに知らず、世間知らずに育ってしまった。いや、そう育てたのは他ならぬ飛焰だ。親をなくし、天涯孤独になった彼女を、真綿にくるむように、大切に、大切に育てるはずだった。

それがかえって仇になるとは。純真無垢な心は、悪人にとっては付け入る隙になる。飛焰は翠嵐が聡明なことを知っていたが、悪意をしない彼女が根っからの悪人に利用されてしまう姿を容易に想像できた。

例え悪人の手から逃れたとしても。

数年前ならばたとえ幼い龍が街に出て、そう案ずることはなかった。それが今の皇帝になってからはどうだ。龍族の売買が堂々と表の市で行われ、龍族の身体は薬として切り刻まれ、どの店にも並ぶようになった。もはやこの国は、龍族にとって危険な国になりつつある。

前の皇帝の治世の折りには、龍族といえば下にもおかぬ扱いであったのに。その頃なら、官軍も使えただろう。なのに、今はこうしてへりくだり、不躰な視線に身を晒さねば港の一つも閉められない。

「ふむ。そなたが龍族の者か」

「はい」

飛焰は気をひきしめた。港を塞ぎ、翠嵐を探すにはこの者の協力が不可欠だ。その舐めるような視線に鳥肌がたつが、幸運だったと思わねばならない。清廉潔白な人物相手ではどうしようもないが、好色な者だからこそ、飛焰は己の身を使って要求を飲ませられるの

だから。

「そなた、なんでも、と言ったな」

「もちろんでございます。」

「良いだろう。近う寄れ」

飛焰は大人しく命令に従った。男の手が伸ばされ、飛焰の頭を、うなじを、無遠慮になで回す。まるで、春をひさぐ女に対するように。

このような扱いは、誇り高い龍族にとって、自害する方がましといえる程の屈辱だった。ましてや飛焰は、龍族の中でも王族に匹敵する位にある。しかし、飛焰は己の誇りの捨てどころを、間違えるつもりはなかった。一度自らを捧げると決めた主のためならば、龍族はどのようなことも成し遂げる。

主に仕えることこそが自分の誇りだ。

飛焰は己の心が男の醜い欲でどんよりと濁っていくを感じたが、目をつぶって耐えた。これも、全て主のためだ。飛焰のあいする、彼女のため。無邪気な彼女の姿を思い浮かべるだけで、ささくれる心が慰められた。

「雁章様。これ以上は……」

飛焰は、女に化した自分がどのように見えるのかをよく心得ていた。やんわりと、この先は要求を飲んでからだと告げて、色を含んだ目を細める。男はいいだろう、と頷いた。

「港を閉める。男と、銀髪に碧の目をした子どもの二人を探すんだ」
飛焰は内心で勝った、とほくそ笑んだ。

夜半。街の裏通りの酒場は、後ろ暗い者たちでひっそりと賑わう。ぼつかりと地下への入り口を開けた古びた酒場「黒鷲」も、その例に漏れず、昼間とはまた違った雰囲気包まれていた。

「よお、こっちだ」

細長い店内の奥に座る男が、手をあげて入り口に気安く呼びかけた。丁度店内に入って来た客は、特に答えることもせず、無言で男

の真向かいにこしかける。相変わらず、無表情で何を考えているかわからない奴だ。男は苦笑すると、店主を呼んで、酒を頼んでやった。

「久しぶりだなあ、昴流。どうだ商売の方は？おまえ、こんどは龍の子どもにまで手を出したのか？」

「：ああ」

少しの親しみをこめた男の言葉に対して、まるで石ころを見るかのような無関心さで、男――昴流が頷いた。

「噂じゃあ、よく懐いてるみたいじゃないか。おまえがえげつないっていうのは知ってたけどなあ。ほんとう、血も涙もない奴だ」

もう慣れっこなのだろう。男は昴流の態度にも怯まず、くく、と笑って酒をあおる。強い酒が喉を焼いた。

「特に用もないのに、気安く声をかけるなど言っただろう」

昴流は少し不機嫌そうに、眉をひそめた。すぐに男は、悪い、と謝った。昼間、雑踏の中で昴流をみつけて、思わず手を上げてしまったのだ。その後、昴流の横にいる子どもに気づき、しまった、と思った。

もの凄い殺気を感じたので慌てて逃げたが結局捕まえられ、夜中に酒場で会うことになったのだ。

「まあいい。何か動きがあるか」

昴流が机に出した硬貨を受け取りながら、男は素早く頭を巡らせた。

「そうだな、最近官吏のところに、龍族の女が接触した。港を閉めるらしい。おまえの連れている龍を探しているみたいだぞ」

「まずいな。あんな小さな龍なのに、もう守護がついているのか」「そうだな。もしかしたら、位の高い龍の子かもな」

昴流の闇の色をした瞳の焦点が少しぼやける。きつと、その伶俐な頭脳で色々と策を巡らせているのだろう。男は、昴流の頭の中など想像しない。昴流の考えていることなど、きつと、へどが出るような残酷なことに違いないのだ。

「そういえば、おまえが前に連れてた龍族の女。あの後江南でどうなったんだ？」

「知らない。あっちで商人に渡した後のことは」

「おまえに惚れるなんて、馬鹿な龍だよなあ。泣き叫んでる女を平気で売り飛ばすような奴の、どこがいいんだか」

男は心底解らない。この無表情な男の、どこを見たら甘い幻想など抱けるのだろう。

「そういえば、おまえの連れてる龍はどうなんだ？ おまえの嫌うような、高慢で生意気なやつか？」

男は純粹に興味があった。それまで、ずっと成人した龍のみを商品として扱って来た昴流が、初めて連れてくる子どもの龍。昴流と子どもという組み合わせは些か珍妙で、街でみかけた時は自分の目を疑ったほどだ。何か心境の変化でもあったのかと勘ぐりたくもなる。

「龍らしい龍だ。純粹で矜持が高く、畏れを知らない。そして……どうしようもないくらい、愚かだ」

しかし返ってきた言葉は相変わらず容赦がなく、どうしてか男は少し安堵を覚えたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1489q/>

昴

2011年8月15日06時51分発行